

「大和物語」の話末表現形式について

古 家 強

〔抄 録〕

本論では、平安朝の代表的歌物語作品である『大和物語』を取り上げる。この作品は、先行の『伊勢物語』に比べて説話色が強まり、発話表現の本文上でのウエイトが大きくなっている等の特色があるが、それ以上にユニークなのが、百六十九段を代表例として、話末が「中断」された形で残されている段が幾つか見られる事である。

これらの話末の「中断」について、高橋正治氏は、「切断形式」として、物語の話末表現の一形式として見る説をとえられている。「中断」を「切断形式」として見ることの妥当性について、百六十九段と類似した話末表現を持つ百四十八段、百七十一段、

附載説話十三段について内容的な考察を行った所、「切断箇所」に続く部分が容易に想起出来る点で、百六十九段とでは、相違が見られた。

『大和物語』の百六十九段の「中断」は、作品に内奥されている表現意図が、自然に表出した話末表現であると後世に解釈・評価されて、『源氏物語』等の後世の物語の話末描写に影響を与えたのではないだろうか。

キーワード 大和物語、話末表現、切断形式

一、百六十九段の「失われた言葉」

『大和物語』は、『伊勢物語』と同様に小さな歌物語の集成されたものであるが、『伊勢物語』に比べてより「和歌説話集」的な要素を

持っている。しかし、一般の説話集の様に説話毎に題が添えられている訳でも無く、章段の区分も明確で無い場合も多い。元々の形態は百六十九段で終わり、その後⁽¹⁾に続く、百七十段から百七十三段までは、後世に補入されたとする説もある。

この説に従えば、元来、この作品の最後を飾っていたとされる百六十九段の有り様は些か変わっている。天福本『大和物語』を底本とする小学館新編古典集本文から抜き出してみる。(以下傍線筆者)

百六十九 井手のをとめ

むかし、内舎人なりける人、おほうわの御幣使に、大和の国に下りけり。井出といふわたりに、清げなる人の家より、女どもわらはべいで来て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こち率て来」といひければ、この女寄り来たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ、こと男したまふな。われにあひたまへ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結ひてもたせていぬ。この子、とし六、七ばかりありけり。

この男、色好みなりける人なれば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思ひもたりけり。男ははやう忘れにけり。かくて七、八年ばかりありて、また、おなじ使にさされて大和へいくとて、井手のわたりに宿りゐて見れば、前に井なむありける。それにくむ女どもあるがいふやう、

この段は、「そこに水くむ女どもあるがいふやう、」で途切れている。⁽²⁾中断されるまでの部分は、百六十九段の中心となる内舎人と女兒との馴れ初めが書かれている。その後の話の筋立てを考える上で、重要

な手がかりになるのが、男の言葉の

「ゆめ、こと男したまふな。われにあひたまへ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結ひてもたせていぬ。

の部分であり、帯を交換する事は、まぎれもなく、婚約の意味を持つもので、後述する様に、当時の読者も良く周知していたと見られる「井出の下帯」物語の発端の部分である。ところが、「それに水くむ女どもあるがいふやう、」と発話の直前の部分で途切れている為に、その後にある筈の男と女兒との再会の部分が描かれておらず、肝心な部分が失われた形となっている。

読者にとつて、「いふやう、」に続く、「失われた言葉」を知りたいと言う欲求を起こさせるばかりではなく、この段の後半の部分がどのような展開を見せるか、全てが謎であり、想像に任せるしかない。また、元々は、この百六十九段は、残りの部分を含めて完全な形で存在していたのではなからうかとの疑念も当然に抱く事になる。

二、「袖中抄」と「山城の井出の玉水」

百六十九段が中途半端な形で残存している点について、新編小学館全集の高橋正治氏に拠る解説文によると、

「大和物語」の原型の最後は百六十九段と見られ、歌も含まれず、その末尾本文は「水くむ女どもあるがいふやう」と切断形式

になっている。切断形式とは末尾本文が、内容的にも形式的にも完結していないものをいうのであつて、余韻を持たせるための形式である。「あはれ」の内容を持った説話の集積の末尾としては、生きた形式になっている。

とあり、高橋氏は、この段には、通常の歌物語の段としては、極めて異例であり、歌を一つも持たず、更に「女どもあるがいふやう、」で途切れている点について、何らかの理由で失われたものではなく、この「和歌説話集」の最終段を飾るに相応しい「あはれ」の余韻を持たせた「切断形式」となっていると見ている。⁽³⁾

まず、この箇所が何故にこの様な中断された形で終わっているかを考えてみる事にしよう。平安末に成立した藤原清輔の『袋草紙』には、『大和物語』について、

大和物語 和歌二百七十首。

この中連歌三首但し本々不同。

作者審かならず。先の朱雀院の御時、天歴の始めの事か。

「先帝」は延喜の御宇なり。「大さおほいまうちぎみ」と号するは貞信公なり。兼盛ならびに檜垣姫の歌有るなり。またその名は和語の由か。古今集の歌等少々有り。

とあり、二百七十首の歌が含まれていた事、成立年代は、天歴年間のことと推定している。二百七十首の歌数については、現行流布本の百七十三段二百九十四首よりかなり少なく原初形態を想像させるかともいわれる。しかし、「本々不同」とある様に、既に当時から様々な形態の本が流布していた事が窺われる。阿部俊子氏及び今井源衛氏校注の

日本古典文学大系『大和物語』の解説には、

大和物語の伝本をしらべると一般に書写年代の新しい本ほど記述が詳しく、文章も合理化されがちであり、またたとえば九十五段の末尾「御返あれど、本になしとあり」や、百四十八段の末尾「あしからじとてこそ人のわかれけめなにか難波の浦もすみうき」、また百六十六段の「これらは物語にて世にあることどもなり」のごとき文は、諸本の異同から見ても、文意からみても、何れも後人の注記らしく、或いは百七十三段のごとき、全段を欠いた異本のあることや、また、その内容措辞からみても、後人の手になるものと考えられるものなどもある。清輔のいう大和物語とは現存本の百六十一段から百六十六段に至る六段、百六十八段及び百七十段から百七十三段に至る四段の計十一段を除き、百六十九段を以て中断形式で終わっており、

と高橋氏の「大和物語の原初形態に関する試論」を引かれ、『袋草紙』記述の通り、現行流布本に比べて歌数かなり少なかったとされている。

問題は、傍線箇所「百六十九段を以て中断形式で終わっており、」の部分であるが、「大和物語の原初形態」の中で、百六十九段が中断形式で終わっていた事を裏付ける資料として、『袋草紙』と同じく平安末期に成立した顕昭の『袖中抄』の中の記述を挙げる事が出来る。百六十九段は、いわゆる「井出の下帯」の物語であり、『袖中抄』巻十三には、百六十九段の本文をそのまま引いて次の通り説明されている。

○ギデノタマミツ

ヤマシロノギデノタマミツテニクミテタノミシカヒモナキヨナリケリ

顯昭云 コレハ伊勢物語云 ムカシヲトコチギレルコトアヤマテルヒトニ此哥ヲヤレリケレド イラヘセズトアリ ギデノタマ水トハ ヤマシロニ ナラヘユクミチニギデノシ水トテメデタキ水ノミチヅラニアルナリ ユキキノ人コレヲテニムスビツツノム此水ヲバ玉ノ井トイフソレヲギデノタマ水トハ云カ タノミシトハテニテノムトイフコトヲ人ヲタノムココロニヨセテヨメルナルベシ

今案ニ 此哥ハギデニテチギレルコトヲタガヘルコトノアリケルニヤ 若大和物語ニカキサシタルコトハコレニヤ

ムカシ内舍人ニアリケル人 オホウワノミテラニヤマトニクダリケリ ギデトイフワタリニキヨゲナル家ヨリメノコドモワラハベイデキテコノイク人ヲミルニキタナゲナキイトヲカシゲナルコライダキテ カドノホトリニタテリ コノ子ノカヲノイトヲカシゲナリケレバ ムマヲトドメテ ソノアコマロコチギテコトイヒケレバ コノ女ヨリキタリ チカクテミルニイトウツクシゲナリケレバ ユメコトヲトコシタマフナ ワレニアヒ給へ オホキニナリタマハムホドマイリコムヨトイヒテ コレヲカタミニシ給ヘトイヒテヲビヲトキテトラセケリ サテカノコノシタリケルヲビヲマタトキトリテ モタリケルフミヲヒキユヒテモタセテイヌコノコノトシハムツナナツ許ニアリケリ コノヲトコイロゴノミ

ナリケル人ナリケレバ ヲカシゲナリケレバ イフニナムアリケル コレヲコノコハワスレズオモヒモタリケリ 七八年アリテ又オナジツカヒニササレテ ヤマトヘイクトテ ギデノワタリニヤドリテギデミレバ マヘニギナムアリケル コレニ水クム女ドモメノワラハナドガイフヤウ

今案ニ 若此事カナハヌヤウニイヒケレバ 此タタミシカヒモナキヨナリケリ トイフ哥ヲバヨメリケルニヤ キハメテ不定ノ推量ニテハアレド 事ノ躰ノアヒニタルナリ 而俊成卿哥云

トキカヘシギデノシタオビユキメグリアフセウレシキタマガハノ水

トヨマレタルハ 此大和物語ノココロトミエタリ サレド此物語ハカキサシタレバ ユキメグリテアフヨシモナキヲ サモアリヌベキコトナレバアヒタル定ニヨミナシタルニヤ 又タマガハノ水トアルモイカガトキコユギデノカハナミトヨミギデノタマ水トヨメル哥ドモヲトリアハセテヨメルニヤ イカガトキコユ

『袖中抄』に引かれている本文と全集本との大きな違いは、「コレヲコノコハワスレズオモヒモタリケリ」の後に続く、「男ははやう忘れにけり。」の一文が抜けている事である。⁽⁴⁾

「ヤマシロノギデノタマミズ」は云うまでも無く、『伊勢物語』の百二十二段

むかし、男、契れることあやまれる人に、
山城の井出のたま水手にむずび

たのみしかひもなき世なりけり

といひやれど、いらへもせず

を踏まえている。その後、『大和物語』全文を引用し、俊成卿の「ときかへし」の歌も挙げ、その歌と『伊勢物語』、『大和物語』の本文との関わりについて論じている。俊成卿の歌は、玉葉和歌集に次の通り収載されている。

玉葉和歌集卷第十 恋歌二

初遇恋の心を 皇太后宮大夫俊成

ときかへし あての下帯 ゆきめくり

あふせうれしき 玉川の水

この俊成卿の歌は、天福本とは系統が異なる中川本にも、

ときかへしあての下草 ゆきめくり

あふせうれしき玉川の水

と補入されている。中川本のこの箇所については、後世、それもおそらく近世以降に玉葉和歌集から「帯」を「草」にかえてそのままとられているに過ぎないと高橋氏は、「大和物語原初形態に関する試論」で述べておられる。⁽⁵⁾

『袖中抄』に拠れば、『大和物語』の百六十九段が途中で終わっている先には、『伊勢物語』百二十二段の「山城の井出の玉水」の歌が詠まれる筈ではなかったかとし、一方では、俊成卿が詠んだ「ときかへしあての下帯」の歌も、『大和物語』の百六十九段の意を汲んで詠まれたのではないかと推定している。この場合は、『伊勢物語』と歌意は異なり、男女が逢うことが出来た喜びを詠んでいるが、この点については、「サレド此物語ハカキサシタレバ」とあり、続きに詠まれ

る歌は、どちらが、正しいとの判断はし難いようだ。

『伊勢物語』では、男との約束を破った女の事を恨む歌に対して、『大和物語』では、男が数年後に同じ三輪山の麓を訪れる話となっている。おそらくは、男の事を忘れず思い続けて来た美しい女性が男に呼びかけるとして、「山城の井出の玉水」の歌が詠まれた場合には、男に対しての恨み心が歌意の中心となるし、俊成卿の様に「ときかへしあての下帯行めぐり」の歌が詠まれた場合には、女が男に再会した喜びを素直に表現した歌になる。

「いらへもせず」と明記され、そこで一つの話が完結している『伊勢物語』に対して『大和物語』百六十九段は、肝腎のところ、中断されているので、この後でどの様な歌が詠み交わされるのか、読者の想像に任されるので様々な解釈が産まれるのがこの段の面白さであり、古来から続きの歌については、様々に論じられて来たのであろう。ここで特に注意したいのは、少なくとも『袖中抄』が書かれた時代、平安時代末期に於いては既に百六十九段が中断された形で終わっていた事であり、末尾の部分が失われたのがかなり古い時代であった可能性が高くなるのである。

この様に古い時代から百六十九段が切断されていた事は、『袖中抄』に引用されているところからも知る事が出来るのだが、果たして、高橋説の通り、百六十九段が「原大和物語」の最後を飾る段であったとしても、「そこに水くむ女どもあるがいふやう、」で途切れている事が、表現上の「形式」として呼ぶことが出来るか否かと言う事が、疑問点として浮かび上がる。現存する大和物語の元となる「原大和物語」が

世に出た後、作者の意図としない形で、当該部分の巻末が失われてしまった可能性も完全には、否定できないからだ。⁽⁶⁾

高橋氏によれば、この点について、先ほど挙げた同氏の「大和物語の原初形態論」では、袖中抄を挙げた後で、

このような末尾形態については

①伝来過程に於ける末尾の落丁、或は虫くひ汚損による欠脱。

②物語の技法

の二つの場合が考へられる。①の場合は、先にも述べたやうに、一六八の挿入された位置の上から、又大和物語成立当時であつたならば、それにある和歌、説話については諸人は譜じてゐるはずであるし、たとへ書誌的事情でその末尾部分が失われたとしても直ちに補はれたであらう。識者によつて極めて早い時期に歌が付加された事は一四八などの例からも顕著である。又、六条家各伝本にも一切同形態であつたことなどからも、もしも落丁汚損の場合であれば、作者自筆原稿に於てと見られる程である。

と汚損・落丁説を退けられている。更に、同氏に拠る「物語末尾形態に関する試論——切断形式の系譜——」では、平安朝の物語の末尾形態については、次の三種類に分類する事が出来るとしている。

①間接話法的形式

②直接話法的形式

③切断形式

高橋氏によれば、紛れも無く、『大和物語』百六十九段の末尾形態は、「切断形式」に拠っているとされている。つまり、百六十九段が切

断された形で残っている点について、作者に拠つて意図的に行われた物語末尾形式の一つであると言うわけである。

三、「切断のあり方」についての内容的考察

百六十九段以外で、「切断形式」が採られていると見られる段について探してみると、百四十八段、百七十一段、附載説話十三段が挙げられる。附載説話十三については、新典社校注叢書5『校注大和物語』（柳田忠則編 底本 御巫本）に基づく。いずれも末尾部分を挙げてみると、

百四十八段 用例①

この男に、「かくおほせごとありて召すなり。なにの、うちひかせたまふべきにもあらず。物をこそたまはせむとすれ。をさなき者なり」といふ時に、硯を乞ひて文を書く。それに
君なくてあしかりけりと思ふにも

いとど難波の浦ぞすみ憂き

と書いて封じて、「これを御車に奉れ」といひければ、「あやし」と思ひても来て奉る。あけて見るに、悲しきことに似ず、よとぞ泣きける。さて返しはいかがしたりけむ知らず。

車に着たりける衣ぬぎて、つつみに文など書き具してやりける。さてなむかへりける。のちにはいかがなりけむ、知らず。
あしからじとてこそ人のわかれけめ

なにか難波の浦もすみ憂き

百七十一段 用例②

（少将）「しばし」といさせて、立ちいでて、広幡の中納言の、侍従にものしたまひける時、「かかることなむあるを、いかがすべき」とたばかりたまひけり。さて左衛門の陣に、宿直所なりける屏風・畳などもていきて、そこになむおろいたまひける。「いかでかくは」とのたまひければ、「なにかは。いとあさましう、もののおほゆれば、

附載説話十三段 用例③

なほこの女、「又行きなん。今は帰りね」といへば、男くちおしう思ひて、

たまさかに君と調る琴の音に

あひてもあはぬ恋をする哉

此の琴ばかりいとをかしきやうに思ひて、「早う帰りといへや」などたゆたうほどに、朽女は密かに覗きて見をれば、「どこなりし盗人の乞食ぞ、さればよるやうありといへるぞかし」とて縛りければ、沓をはきもあへず男は逃げにけり。女も息もせでうつぶしにけり。それよりこの女さらに事の伝をだにえずましう、物いはせけるたよりも絶えて、寄せずなりにければ、いふかひなくて、

それぞれの「切断箇所」に限定して示してみると、次の通りとなっている。

百六十九段 それに水くむ女どもあるがいふやう、
百四十八段 さて返しはいかがしたりけむ知らず。

百七十一段

いとあさましう、もののおほゆれば、

附載説話十三段

寄せずなりにければ、いふかひなくて、

百四十八段

百四十八段については、先ほどの「大和物語の原初形態論」でも引用されているが、その末尾部分を挙げて見る。（用例①参照）

全集本の高橋氏頭注によれば、「車に着たりける衣ぬぎて、」以下の部分が、後世になって補入された部分とされ、もともと、百四十八段は、「けむ知らず。」で切れる「切断形式」であつたとされている。

百四十八段の「君なくて」の歌は、『拾遺和歌集』に次の通り収載されている。

拾遺和歌集卷第九 雑下

なにはに、はらへしにある女まかりたりけるに、もとしたしく侍けるおとこの、あしをかりてあやしきさまなり、道にあひて侍けるにさりけなくて、としころえあはさりつることなといひつかはしたりければ、おとこのよみ侍ける

君なくてあしかりけりとおもふにも

いと、なにはの浦ぞすみうき

返し

あしからし よからむとてそ わかれけん

何かなにはのうらはすみうき

詞書の「なにはに、はらへしにある女」云々については、百四十八段本文に

（女）「津の国といふ所の、いとをかしかなるに、いかで難波に祓

へしがてらまからむ」といひければ、

(男)「いとよきこと。われももろともに」といひければ、

(女)「そこはなものしたまひぞ。おのれひとりまからむ」といひ
ていでたちにけり。

とある部分に相当し、『拾遺集』の詞書は、百四十八段の本文を簡潔
に説明している。但し、『拾遺集』と補入部分の歌の上の句では、

拾遺和歌集 あしからし よからぬとてそ わかれけん

百四十八段 あしからじ とてこそ 人のわかれけめ

の異同が見られ、更に下の句でも「なにはのうらは」と「難波の浦も」
と相違部分が見られる。また、『拾遺集』の宮内庁書陵部本には、こ
の返しの歌の部分が欠落している。この返歌は、勅撰集にも載ってい
る事から、当時の識者層には容易に想起し得る歌であり、これらの点
から、仮に百四十八段が「さて返しはいかがけむしたりけむ知らず」
で終わっていても容易に補入出来たと推定される。

百七十一段

次に百七十一段の終結部分(用例②参照)を見ると、

さて左衛門の陣に、宿直所なりける屏風・畳などもていきて、そ
こになむおろいたまひける。「いかでかくは」とのたまひければ、
「なにかは。いとあさまじう、もののおほゆれば、

宮仕えする大和という女房が少将の君を訪ねて参内した。長い年月
の間に、左大臣となった男は大和の事を覚えていて、面白く思っ
て見る事にした。左衛門の陣に宿直所にあった屏風や畳等を持って
いって、左大臣は、「なんでこんなことを」とおっしゃると、大和は、

「どうでもありません。あなたのなさりようが、あんまりな事を思わ
れたので、・・・」で途切れている。

幾つかの異本では、この後に、

敦慶の皇子の家に大和といふ人に、左大臣
今さらに思ひ出でじと忍ぶるを

恋しきにこそ忘れわびぬれ

と書き入れがあり、この歌は、『後撰集』巻十一に次の通り収載されて
いる。

後撰和歌集卷第十一 恋歌三

あつよしのみこの家にやまと、いふ人につかはしける 左大臣
いまさらに思ひ出しと忍ぶるを

恋しきにこそ 忘れ侘ぬれ

百七十一段に登場する「大和といふ人」は、『続本朝通鑑』に、

敦慶式部卿親王侍女多シ。其ノ中ニ大和ト曰フ者アリ。

其ノ父母ハ不詳、美色アリ、和歌ヲ能クス

とあり、『大和物語』の作者でもあり、書名もこれに由来するという
説がある。説の是非はともかくも敦慶親王と大和との関係は、当時の
人にも伝説化しており、『後拾遺集』に収載される程の有名な歌があ
ると言う事も周知の事であったので、当時の読者層にとって、文が切
断されていても、その後を容易に思い出せた筈である。

附載説話十三段

また、『大和物語』には、『平中物語』と深い関係があると見られる附
載説話が存在する事も知られている。その附載説話十三(用例③参照)

には、

なほこの女、「又行きなん。今は帰りね」といへば、男くちおしう思ひて、

たまさかに君と調る琴の音に

あひてもあはぬ恋をする哉

此の琴ばかりいとをかしきやうに思ひて、「早う帰りといへや」などたゆたうほどに、朽女は密かに覗きて見をれば、「どこなりし盗人の乞食ぞ、さればよるやうありといへるぞかし」と縛りければ、沓をはきもあへず男は逃げにけり。女も息もせでうつぶしにけり。それよりこの女さらに事の伝をだにえすまじう、物いはせけるたよりも絶えて、寄せずなりにければ、いふかひなくて、と最後の部分が切斷されている。この十三段は、『平中物語』二十七

段に類似した内容が見られる。静嘉堂文庫蔵本『平中物語』に拠ると、「たまさかに聞けと調ぶる琴の音のあひてもあはぬ声のするかな」といひたれば、この、琴弾きける友だちも、「はや返ししたまへ」といひけるほどに、親聞きつけて、「いづこなりし盗人の鬼の、わが子をば、からむ」といひて、いで走り追へば、沓をだにもえ履きあへで、逃ぐ。女どもは呼吸もせで、うつぶしふしにけり。かかりけれど、いみじう制しければ、言の通はしをだにえせで、ものいひけるたよりも尋ねて、寄せざりけるほどに、この人にあはせてけり。さりければ、男、親さにあはすとも、さやはあるべきとぞ、思ひ憂じてやみにける。

附載説話の「寄せずなりにければ、いふかひなくて、」以降に相当

する『平中物語』の本文は、傍線部の「寄せざりけるほどに、……やみにける。」までである。

この場合、附随説話が、「……いふかひなくて、」と文章の途中で中斷しているのに対して、『平中物語』の場合は、「やみにける。」と結果を言い切っているのだが、表現したい内容は、ほぼ一致している。つまり、「結果的にどうしようもなく無為に終わった事」を伝えようとしているのである。この附随説話の場合も形式的には、中斷しているながらも、伝えたい意味内容は読者には容易に把握出来る。

以上、百六十九段と類似した「切斷形式」を採っている百四十八段、百七十一段、附随説話十三段の三つのケースについて内容的に考察してみたが、いずれも、その先にどの様な内容的結末がくるのか推察する事は容易であつた。

つまり、「切斷」以前の箇所本文や和歌を理解する事で、その内容を延長させれば、一般的な知識のレベルで、普遍的な結末の有様を想起出来る点で共通点が認められたのである。これは、百六十九段が、当時の一般的な物語や和歌の理解のレベルはまだしも、歌学の専門家を持つてしても、「中斷」の後にくる結末が、明確に特定し難い状況と比べて極めて対照的であると言えよう。

この様に見れば、百六十九段のいわば、恣意的な「中斷」と百四十八段、百七十一段、附随説話十三段の「切斷形式」とは、大きな隔たりのあるのではないだろうか。

『大和物語』の原初形態が高橋説の通り、百六十九段の「切斷箇所」が再末尾で終わっており、百七十段以降は後世の補筆であつたとすれ

ば、第三章で述べた百六十九段の「切断形式」と類似形式を持つ章段との相違が生じた理由については、次の様な仮説が成り立つてであろう。

「百六十九段の中途まで残されていた『大和物語』を享受する際、その「切断箇所」が、当時の和歌や物語の享受・趣味嗜好の中で、新たな表現上の興味を喚起し、当時の『伊勢物語』や『拾遺集』等の勅撰集等を含めた和歌と物語の世界の接点の中で、作品の結末に余韻を産み出す「切断形式」の表現と認識され、更には、「切断形式」を持つ百七十一段等の補筆につながった。」

但し、この仮説は、百六十九段が意図的に「切断・中断」された形で残された場合も後世に何らかの事情で「失われた」場合にも成り立つ事は完全には否定出来ない。高橋氏は、百六十九段が早い時代からこの様な形式で存在していたとする証拠として、『袖中抄』等の資料を取りあげているが、『大和物語』成立直後の年代の資料とは言えず、かなり時代が経過してから成立した資料である事から、決定的証拠とは言いい切れない。この点については、更に精査が必要になってくるだろう。

四、源氏物語の話末表現への影響（若菜下の巻を例に）

何れにせよ、『大和物語』の百六十九段の末尾が、「切断」された形で残された事が、後の時代の物語表現の話末表現に大きな影響を与え、ついには、『源氏物語』の表現世界に大きな広がりを与えている例として、若菜下巻から挙げてみよう。

御賀は、二十五日なりけり。かかる時のやむごとなき上達部の

重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々とどこほりつることだにあるを、さてやむまじきことなれば、いかでか思しとどまらむ。女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の。

若菜下の話末の部分は、『大和物語』の百六十九段末尾やそれ以外の「切断形式」の段と同様に文章は完結しておらず、「摩訶毘盧遮那の。」で途切れている。作者が、この様な「切断形式」を採用した理由は、何であつたのだろうか。

若菜下の後半から結末にかけての部分では、紫の上の発病、柏木と女三の宮の密通と懷妊、柏木の病氣と忌まわしい出来事が、次々と重なる有様が描かれている。こうした不幸の頂点とも言うべき箇所で、「摩訶毘盧遮那の。」の言葉が見られ、同時に語り手による叙述が中断される。

「朱雀院の御賀に本来ならば出席しなければならない柏木が重病になつてしまつて親兄弟、その他大勢の人々が嘆き悲しんでいる時で、ぞつとする程、もの淋しい時ではあるけれども、度々延期されて来たので、取りやめる事も出来ず、どうして思いとどまれる事が出来ようか。女宮の御心の内さえもいたわしくお思い申される。例のとおり、五十寺の御誦経、また、あの朱雀院がおわします御寺でも摩訶毘盧遮那の御誦経が。」

この末尾部分の直前には、悲しみに打ち沈む柏木の親族の有様が描

かれる一方で、柏木巻の冒頭部には、引き続き柏木の日々重りゆく様態が描かれている。そのまま、次の柏木巻へ続けて行けばよいものを、朱雀院の五十賀の様子を描いた末尾部分が、わざわざ挿入され、しかも、文章が中断されているのである。

何故、この様な末尾部分が挿入されたかについて考察してみると、この作品の中で最も、暗い救いようの無い展開を描くに当たって、その対照として、朱雀院の御賀の描写を持つて来た。こうして、不幸が続いているにもかかわらず、御賀は滞りなく行われ、御誦經の聲が語り手にも聞こえてくるのである。また、「大毘盧遮那神變加持經」の文句が語り手の耳に響いてくるのをそのまま読者に伝える事で余韻を読者に委ね、次の巻へと誘おうとしているのである。

この様に若菜下の巻の「切断形式」による末尾表現は、この巻全体の内容に深く係わっており、その語り手による心情表現の頂点のところで中断されている為に、大きな効果を発揮し、読者には、柏木巻以降への展開に期待をもたせ、その感動を次の巻に伝える様に仕組まれているのである。

では、次に取り上げるこの長編物語の末尾巻である夢浮橋巻ではどうだろうか。その末尾表現は、中途半端に終わっており、その後の作品の展開への方向性は、読者によって様々な解釈が成り立つ程、恣意性が強い。この点では、百六十九段の「切断形式」に類似している。

いつしか待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来れば、すさまじくなかなかかなりと、思ふことさまざまにて、人の隠しすゑたるにやあらむと、わが御心の思ひ寄らぬ限なく、落としおき給

へりしならひにとぞ、(本にはべるめる。)

この括弧部分の「本にはべるめる」については、青表紙系諸本でも校異が見られるが、本来は、「ならひにとぞ。」で終わっていたのを中途半端である事から、「本にはべるめる。」と補入されたとする注釈がある。例えば、『湖月抄』の北村季吟注には、次の様に示されている。

是は一部を我かかぬと見せたる詞也。本にあるをうつしたるよし也。但此詞あるは、異本也。されども、此詞をよみたるよき也。習ひにとぞとあるは、書きさしたるやうなり。本に待るめるは、一部のとおりたるになる也云々。

作品の末尾に相応しい終わり方として、語り手が今、手にしている「本にはべるめる」事を示す方法で、物語全体を締めくくる「言葉」として終結感を持たせようとしたのであるが、これが、作者の意図であるのか後世の享受者の仕業なのか、判断のしようが無い。

しかし、この「中断」が読者の想像に委ねた世界は、『大和物語』の百六十九段よりも遙かに広大なこの巨編に相応しい広がりを見せている事を鑑みれば、「本にはべるめる」と敢えて限定させてしまふ必要はなく、「ならひにとぞ。」で終わる方が妥当な方法では無からうか。

読者は、「果たして、あまたの苦難を乗り越え、仏に救いを求めた浮舟には、宿世からの救いがもたらされるのであろうか。薫や匂宮との間には、これからの様な出来事が起こるのだろうか。」と無限の想像世界に身を委ねる以外にないのである。

ここでの「切断形式」は、あたかも「夢の浮橋」の様に読者を、無限の夢想世界が広がる彼岸に導くのである。そして、それは、物語の

話末表現としては、一つの完成の域に達している事を意味するに他ならないのである。

五、結 び

これまで、『大和物語』の「切断形式」にまず注目し、更には、『源氏物語』の末尾表現への影響まで考察を進めた訳だが、それは、王朝物語文学の長い発展の経緯を辿る道に他ならなかった。

つまり、勅撰集の詞書的な面影を多く残していた『伊勢物語』に見られた歌物語の表現の形式的限界を超え得る表現手段として、「切断形式」が産み出されたとすれば、この新しい表現手法の発見が、物語の話末表現に多様性を産み出し、新たな内容的な広がりを獲得する過程につながったと言う事になる。その結果が、『源氏物語』の夢浮橋巻の無限に広がる世界の描写につながったとすれば、物語文学史的に見ても、その「失われた言葉」には、大きな意義を見出す事が出来るのではないだろうか。

〔注〕

(1) 「大和物語の原初形態に関する試論」(高橋正治氏 国語と国文学昭和三十年六月号)

(2) 『大和物語抄』(北村季吟注釈 本多伊平編著 大和物語抄 和泉書院)には、

又ある本に云々それに水くむ女ともあなるが云ふやうそのゆくゑもと

をらむとたたひとくちいひてすゑをいひさしつ。

とあるが、これは、本書の成立年代からして、明らかに後に付加されたものと考えられる。しかし、この付加部分に拠ると、男が最初に出逢った母親と娘は、元々いなかった事になり、人間ではなくて、神仙や変化の類であったとすれば、三輪山信仰と神婚説話との影響を感じさせるものとしてそれなりに興味深い。

(3) 「物語末尾形態に関する試論——切断形式の系譜」(高橋正治氏 平安文学研究一九六〇年三月号) 及び新編古典文学全集『大和物語』の同氏に拠る解説文に『大和物語』百六十九段の末尾部分は、本文伝来過程に失われたものではない事については、本文批判の立場から『袖中抄』を挙げて、少なくとも平安末期には、百六十九段の末尾が切断された状態であったと推定し、表現目的の為に、敢えて「切断形式」がとられていると主張されている。また、大和物語以外では、『源氏物語』夢浮橋巻の末尾「とぞ本にはべめる。」について、「切断形式」の立場から説明されている。

(4) 『大和物語評釈』(今井源衛著 笠間書院)の校異に拠ると、伝為氏三条西家本以外の諸本は、大和物語抄を除き、この一文が抜けているとある。全集本底本の天福本にもこの一文が抜けている筈であるが、校注者の判断で、補入されたのであろう。

(5) 中川本については、高橋氏の「大和物語の原初形態に関する試論」に記述されているも、本文未確認。

(6) 『袋草紙』にある様に『大和物語』の成立が、天暦年間まであったとすれば、『袖中抄』の時代まで少なくとも二百年以上経過している事になる。これだけの期間があれば、伝本過程で本文の一部が失われる可能性は、かなりあったと考えられる。

(7) 百四十八段の補入・書き入れについては、「大和物語の原初形態に関する

る試論」では、「たとへ書誌的事情でその末尾部分が失われたとしても直ちに補はれたであらう。読者によつて極めて早い時期に歌が付加されたことは、一四八の例からも顯著である。」とされている。一方、同じ高橋氏校注に拠る全集本『大和物語』の同段の頭注には、「ここで、そのあとのことは知らない、と切斷して話を終り、余情を残している。もともとは、ここまでで終わりのはずである。」とされていて、前者が書誌的事情による「落丁汚損説」であつたのが、後者では、「切斷形式説」に変わつている。結局は、少なくとも百四十八段については、どちらも判別し難いと云う事になるのだろうか。

〔参考文献・引用本文〕

『大和物語』…新編古典文学全集

〔校注 大和物語〕(柳田忠則編 新典社)

『伊勢物語』『平中物語』…新編古典文学全集

『源氏物語』…新編古典文学全集

『源氏物語湖月抄』…北村季吟著・有川武彦校訂(講談社学術文庫)

『袋草紙』…新日本古典文学大系

『袖中抄』…「袖中抄の校本と研究」橋本不美男、後藤祥子著 笠間書院

『古今和歌集』…日本古典文学全集

『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』…正保版本二十一代集他

(ふるや つとむ

通信教育課程文学研究科

国文学専攻修士課程修了)

(指導…上野 辰義 教授)

二〇〇四年十月十五日受理